

哲学歴史学科世界史コース

第一次世界大戦前後のイギリスにおける女性
像の変化とその分析

—ヴェラ・ブリテンとヘレン・ゼナ・スミスの
著作に描かれる従軍看護婦と救急車運転手
の分析を中心に—

文学部 2022 年度

A21LA606

たかくら えいひ

高倉英媛

目次

はじめに.....	2
第1章 戦前、戦中、戦間期の女性.....	6
第1節 戦前の女性像.....	6
第2節 戦前の女性の活動.....	9
第3節 戦中・戦間期の女性像.....	11
第4節 戦中・戦間期の女性の活動.....	14
第2章 『青春の遺言書』とヴェラ・ブリテンの日記において描かれる女性像の考察.....	18
第3章 『西部戦線異状あり—戦争の継娘たち』において描かれる女性像の考察.....	31
おわりに.....	40
参考文献.....	57

はじめに

本論文では、第一次世界大戦中のイギリスにおいて従軍看護に携わった女性を描いた戦間期の作品に見られる女性像について明らかにする。

第一次世界大戦において、国民は前線と銃後に分断された¹。前線に行くことができなかった女性たちは、愛国心を示すために活動した²。また、女性は戦場へ向かった男性の代わりとして雇用された³。加えて、制限があったものの、1918年に女性参政権が実現するなど⁴、戦中、戦後のイギリスにおいて女性は社会進出を果たした。

1990年代以降、女性の戦争経験への関心は高まりを見せ⁵、第一次世界大戦が勃発して100年を迎えた2014年には最高潮に達した⁶。研究では、当時の女性が残した手紙や日記、小説、自伝などの史料が再検討された⁷。それまでの第一次世界大戦に関する研究では、下士官や将校のようなエリート男性の経験が主に扱われていたが、看護師や救急車運転手、銃後の人々といった、着目されてこなかった人々の経験にも焦点が当たるようになった⁸。例えば林田は、女性警察組織を対象に、第一次世界大戦期の活動と、ジェンダー秩序を乗り越えた彼女たちが戦間期に問題視されたことを述べ、第一次世

界大戦期のジェンダー概念やセクシュアリティについて考察している⁹。また、荒木は第一次世界大戦のイギリスにおける女性の看護活動について取り扱っており、手記やジャーナルなどの史料を通して、第一次世界大戦を従軍看護婦の立場から明らかにし、戦中の看護を看護師の中に位置づけている¹⁰。

上記のように、戦中の女性の経験が着目されていく中で、第一次世界大戦が女性の解放に影響を与えたのか否かという論点が登場した。サミュエル・ハインズ(Samuel Hynes)は、第一次世界大戦が戦前の生活と価値観を終わらせたとして、第一次世界大戦を評価している¹¹。しかし、1960年代以降、政治や経済等における実権は今もなお男性にあるという視点から、第一次世界大戦が女性に与えた影響の再検討が行われ、女性の解放は上辺だけであったという主張が登場し始めた¹²。吉田は、労働という観点から再検討を行い、第一次世界大戦後の女性の地位に大きな変化はなく、女性は家庭にいるべきであるという考えにも変化はなかったと結論づけている¹³。また、戦争は家父長制社会を作り出す慣例である父系継承の規則を覆したとするサンドラ・M・ギルバート(Sandra M, Gilbert)の論を¹⁴、シャロン・ウディット(Sharon Ouditt)も否定している¹⁵。

しかし、林田は1928年の男女平等参政権の成立を例に挙げ、第一次世界大戦前後の社会を連続的に捉えようと試みる中で、戦間期

の明確な変化について考えるべきだと指摘し、第一次世界大戦は女性の解放に影響を与えなかったという考えに疑問を投げかけている¹⁶。林田は、主に労働者階級の女性の経験に注目している。2022年には、陸軍の付属組織として組織された陸軍女性補助部隊の隊員たちの回想録から、部隊の多くを占めた労働者階級の女性たちの経験を読み解き、男性の領域に足を踏み入れた彼女たちの姿を明らかにしている¹⁷。

しかし、労働者階級だけでなく、上・中流階級の女性もまた、戦時中に多様な活動を行っている。そのような女性について検討することで、当時の女性の姿をより広範に捉えることが可能になる。そこで本論文では、林田が取り扱った労働者階級の女性が多い陸軍女性補助部隊とは対照的に、上・中流階級の女性を中心に構成された救急看護奉仕隊(Voluntary Aid Detachment:以下 VAD と略記する)¹⁸に着目する。そして、「女性らしい」活動であるとされていた¹⁹、看護を行った VAD の隊員の経験を描いた著作をもとに、そこから見える女性像を明らかにする。VAD に所属していた女性の姿を分析することで、陸軍女性補助部隊とは異なる性質を持つ組織に属していた女性の姿を提示することが可能になる。

なお、史料として 1933 年に出版されたヴェラ・ブリテン(Vera Brittain)の著書『青春の遺言書(*Testament of Youth*)』²⁰と日記²¹、

1930年に出版されたヘレン・ゼナ・スミス(Helen Zenna Smith)の著書『西部戦線異状ありー戦争の継娘たち(Not So Quiet...Stepdaughters of War)』²²を主に用いる。これらの作品はどちらもVADに所属した女性を題材とした作品であり、そのような女性の姿を明らかにする上で有益である。また、『西部戦線異状ありー戦争の継娘たち』はフィクションであるが、川本が指摘している通り²³、小説には現実の社会で望ましいとされた女性像が反映されていると考えられるため、本論文では戦間期の小説における女性像から、当該時期の社会における女性像を読み取っていく。

第1章ではまず、1890年代から戦争が始まる1914年までの女性について概観する。次に戦中・戦間期の女性について概観する。第2章では『青春の遺言書』と日記の中で描かれる女性像について分析、考察していく。第3章では『西部戦線異状ありー戦争の継娘たち』の中で描かれる女性像について分析、考察していく。おわりにでは、大戦前後の女性像の変化と、作品から明らかになった女性像を照らし合わせ、新しい女性像が生まれた背景について考察する。

これらを通して、第一次世界大戦中の女性について描かれた作品における女性像を明らかにし、戦前からの女性像の変化を分析する。

第1章 戦前、戦中、戦間期の女性

第1章では、1890年代から1930年代までのイギリスの女性について、女性像と女性をとりまく環境という2つの観点から見ていく。

なお、以降本論文では、ヴェラ・ブリテン、ヘレン・ゼナ・スミス両名が生まれた1890年代から1914年までを戦前、1914年から1918年までを戦中、1918年から両作品が出版された1930年代までを戦間期と定義する。

第1節 戦前の女性像

この時代は、「家庭の天使(Angel in the House)」と呼ばれた、ヴィクトリア朝時代の女性像に変化があらわれた時代であった。

「家庭の天使」とは、ヴァージニア・ウルフ(Virginia Woolf)が名付けたもので²⁴、家庭という逃げ場を夫に提供する良き妻、母のことであり²⁵、ヴィクトリア朝時代の社会において女性の理想とされた²⁶。「家庭の天使」が登場した要因には、仕事場と家庭の分離が挙げられる。家庭が仕事場から分離した結果、仕事で疲れて帰宅する男性が快適に過ごすための癒しの存在としての「家庭の天使」が、女性たちに求められるようになったのである²⁷。また、福音主義運

動から派生した上記のような家庭観・女性観が、産業革命に伴う生活の質の向上に付随して、中流階級に定着していったと今井は考察している²⁸。

「家庭の天使」が理想とされる社会の中で、女性たちは基本的には母親やガヴァネスと呼ばれる女性家庭教師から社交に関する教育を受け、結婚に備えて慎みや奉仕の精神、自己犠牲を身に着けた²⁹。ガヴァネスとは住み込みの中流階級出身女性家庭教師のことである³⁰。当時の女性たちにとって、身体的なことへの言及は慎みのないことであった³¹。従って、女性たちは十分な性教育を施されることがなかった³²。家で教育を受けるのではなく、規模の小さい学校へ通った少数の女性たちも同様に「女性らしさ」を学んだ³³。当時の社会において、野心や知的好奇心は、女性たちにふさわしいものではないと考えられており、同年代の男性が受けていたような高等教育が女性に施されることはなかった³⁴。当時の女性教育で目標とされた、慎み深く、貞操を守り、男性が快適に暮らすための家庭を守る「家庭の天使」という女性像は、前述の通り主に中流階級女性に定着していた。しかし、当時の労働者階級で、中流階級の生活が模倣されていたことから、「家庭の天使」は中流階級の女性に限られた女性像ではなかったとすることができる³⁵。さらに、中流階級の女性が労働者階級の女性の模範となることを奨励されていたというジョ

ーン・N・バースティン(Joan N. Burstyn)の指摘からも³⁶、「家庭の天使」が労働者階級にとって模範的な女性像になっていたと考えられる。

戦前の社会では、幅広い階級において「家庭の天使」が理想とされたが、1880年以降の小説においては、「新しい女(New Woman)」と呼ばれる女性が登場してくる³⁷。女性作家セアラ・グランド(Sarah Grand)によって名付けられた「新しい女」の示す女性像は、「解放された女」「余剰の女」などとも呼ばれた³⁸。雑誌や小説の中で表象される「新しい女」は、登場した当初、結婚しない女、スポーツをする女、自転車に乗り、参政権を求める女、仕事をする女などとして描かれたが、現実を反映しており³⁹、精神的に自立し⁴⁰、性に奔放で⁴¹、母性がない存在として社会に表象された⁴²。

「新しい女」が登場した背景には、19世紀半ばのイギリスにおいて社会問題となった「女余り現象」が挙げられる⁴³。未婚女性の数が増加したのである⁴⁴。結婚できない彼女たちは、ヴィクトリア朝時代の秩序を動揺させた⁴⁵。

そこでフェミニストたちは、「女余り現象」を女性の労働機会や教育機会の拡大の要求へと繋げた⁴⁶。そして1840年代以降、女性の教育を改革しようとする運動が始まった⁴⁷。19世紀後半に至るまで、女性は「男性の領域」であった大学で学ぶことができなかったが⁴⁸、

女性が大学に行くことが認められるようになった⁴⁹。また、結婚できない女性たちは、これまでのヴィクトリア朝的な家族主義に疑問を抱くようになり、従来の結婚制度に対する脅威となった⁵⁰。

以上で見てきた、性欲を持ち、教育を受け、仕事をし、男性の領域へと足を踏み入れた「新しい女」という女性像は、ジェンダー規範を揺るがせ、ヴィクトリア朝の社会で理想とされた「家庭の天使」という女性像の変化に影響を与えたのであった。

さらに川本は、「新しい女」が登場した最も大きな要因としてフェミニズム運動が勢いを増したことを挙げている⁵¹。次節では、戦前の女性の活動である、女性参政権運動と慈善活動について述べていく。

第2節 戦前の女性の活動

イギリスにおいて 1867 年に本格化した女性参政権運動では⁵²、「新しい女」たちが活躍した。1880 年代後半から 1890 年代初頭にかけて、低迷期に陥った女性参政権運動であったが、1890 年代中頃にニュージーランドや南オーストラリアにて女性参政権が認められたことや、1894 年に地方選挙権が既婚女性に拡大されたこと、1895 年に女性参政権に賛成する議員が多く当選したことにより、1890 年

代半ばに女性参政権運動は勢いを取り戻した⁵³。

1903年になると、戦闘的女性参政権運動を行った女性社会政治連合が結成され、停滞していた女性参政権運動に変化を与えた⁵⁴。一方で、穏健派も宣伝活動を拡大し、1906年以降、女性参政権運動は人々の注目を集め、女性参政権は政治的課題となった⁵⁵。女性たちは徐々に自分を取り巻く不利な環境に疑問を抱くようになったのである⁵⁶。穏健派の代表である女性参政権協会全国連合は急速に協会数を増やし、民主的な組織運営を行った⁵⁷。そのため、1910年までには強力かつ重要な政治的機構になった⁵⁸。他方、女性社会政治連合による戦闘的行為が1912年に再開された⁵⁹。そして1914年、第一次世界大戦が勃発すると、女性参政権運動は停止した⁶⁰。

「新しい女」が女性参政権運動において活躍する一方で、「家庭の天使」としての女性たちは、同時代に行われた慈善活動に力をいれた。1870年代の終わりまでには、裕福な女性たちが慈善活動を行うことが流行となっていた⁶¹。特に福音主義の影響を強く受けた彼女たちは、慈善活動を担った⁶²。このような活動は当時の女性たちにとってステータスでもあった⁶³。

「新しい女」の特徴に参政権を求めていることが挙げられているように、女性参政権運動に参加する女性たちは「新しい女」の例の1つであり、女性参政権運動が活発になるにつれ、それまで「家庭

の天使」であった女性たちがヴィクトリア朝的な価値観に疑問を持つようになった。一方で、「家庭の天使」たちが戦前に慈善活動に注力していたことは、戦中に女性たちがヴォランティア活動を行ったことに繋がっている⁶⁴。そこで次節では、戦中の女性像に加えて、戦間期の女性像について見ていく。

第3節 戦中・戦間期の女性像

戦中、社会が女性に求めた女性像は3つ存在する。1つ目は兵士を鼓舞する存在である。女性たちは募兵ポスターに起用された⁶⁵。そこに描かれる女性たちは男性たちに出兵を呼びかけたが⁶⁶、実際に募兵運動を行う女性も存在した⁶⁷。

2つ目は母である。女性には兵士を産む母としての役割も求められた⁶⁸。しかし、子を産むことを求める一方で、女性のモラルには偏見の目が向けられることもあった⁶⁹。このことが、3つ目の女性像、「女性らしい女性」に関わってくる。女性たちは戦中に看護や労働、陸軍のサポートなど、様々な形で戦争に貢献したが、このような女性たちに対する社会の反応は冷たかった。例えば、陸軍女性補助部隊のような、軍服を着用した組織に入隊した女性は社会から批判された⁷⁰。そして、ジェンダー基準の変化が指摘され、性モラルの低下

が社会から問題視されるようになった⁷¹。このことは、モラルを取り戻すために女性警察が組織されることにも繋がった⁷²。つまり、「女性らしさ」を持ち、モラルを守る女性、「家庭の天使」が求められていたのである。

では、女性たち自身はどのように考えていたのだろうか。兵士になることができない女性たちは愛国心を示すために活動したが、部隊に入隊した女性たちは自分たちを銃後と切り分けて捉えていた⁷³。また、社会の厳しい目線がありながらも、女性の性モラルが低下していたことが、ヴェラ・ブリテンの著作から読み取ることができる⁷⁴。その一方で、女性たちは、社会から求められる「女性らしい」女性像を守ってもいた。例えば、陸軍女性補助部隊のバッジは薔薇や百合といった「女性らしい」デザインであり、男性への配慮がうかがえる⁷⁵。

以上で見てきたように、戦中、女性たちは兵士を鼓舞する存在、母、「家庭の天使」として社会に求められていた。女性たちはそのような女性像に概ね寄り添ったが、愛国心を示すためにジェンダー規範を乗り越え、部隊に入隊した女性たちは、銃後とも兵士とも違う存在として自らを位置づけた。

一方で戦間期の女性像においては、社会が求めるものと、女性たち自身が抱くものとの間に乖離が生まれた。大戦中、男性の領域に

足を踏み入れた女性たちは、ジェンダー秩序を揺るがした⁷⁶。とりわけ、女性の生活は戦間期に激変した。1923年に女性は髪を切るようになり、1924年以後にはスカートも短くなり、動きやすい服装に変化した⁷⁷。化粧や飲酒、喫煙も上・中流階級の女性に見られるようになった⁷⁸。また、男女の交流に制限がなくなり、仕事や勉学においても、男女はほとんど同じになった⁷⁹。さらに、女性の性モラルにも変化が見られた。女性には性欲がなく、性的なことを嫌悪するという考えは修正され⁸⁰、女性の性モラルに関する見解は変化した。このように、戦間期の女性たちは「家庭の天使」という女性像を打ち破り、「新しい女」へと変化していた。

しかし、このような女性の解放は一時的なものであり、ジェンダー規律に変化はなかったという見解が近年の研究の主流であるということを経田は指摘している⁸¹。実際に、ヴェラ・ブリテンも「女性の愛国者は1919年に信用を失った⁸²」と述べており、社会から野蛮な若者として恐れられたと書き残している⁸³。短いスカートを履き、化粧をし、慣習や道徳から解放された女性は、戦前の女性像を理想とする人々から、国が没落した原因であると見なされた⁸⁴。また、軍需産業に従事していた女性たちは家庭へと押し戻された⁸⁵。男性たちは戦前の女性像を取り戻そうとし、雑誌や新聞などにおいて女性に対する反対活動を実施した⁸⁶。

以上のように、女性たちが「新しい女」へと変化していく中で、社会はそのような女性たちの変化を批判し、「家庭の天使」としての女性を求めていたのである。そして、社会は女性を家庭に押し戻そうとした。

第4節 戦中・戦間期の女性の活動

戦中、女性たちは社会が求めるように兵士を鼓舞する活動を行った一方で、前線へと向かった男性の代わりにジェンダー規範を乗り越えた活動も行った。例えば、女性による兵士を鼓舞する活動として募兵運動が挙げられる。その代表的なものが「白い羽運動」である。「白い羽運動」とは、軍服を着ていない男性に臆病者の印として白い羽を渡す運動のことである⁸⁷。

兵士を軍隊に送り込む活動をした女性がいる一方で、自ら軍隊に入隊し、ジェンダー規範を乗り越えた活動を行った女性もいた。例えば、ヴェラ・ブリテンやヘレン・ゼナ・スミスが所属していた VAD や、陸軍女性補助部隊などである。

VAD とは、政府公認の看護組織のことである⁸⁸。入隊を志す者は、応急処置や家庭看護、衛生に関する授業を受け、試験に合格して資格を取得することで入隊することができた⁸⁹。授業料、試験費は自

己負担であり、隊員には上・中流階級の女性が多かった⁹⁰。VADでは看護だけでなく、軍隊内の料理や洗濯などといった「女性らしい」仕事が大半だったが、1916年以降は「男性らしい」仕事と言える救急車の運転をすることもあった⁹¹。

陸軍女性補助部隊とは、陸軍の付属組織のことで、軍隊内の非戦闘任務を男性の代わりに担った⁹²。料理人やタイピスト、電話交換手などとして、主に労働者階級の女性が入隊した⁹³。労働においても、戦場へ向かった男性の代わりとして、女性は様々な職に就き、ジェンダー規範を乗り越えた。特に、軍需産業において女性は多く受け入れられた⁹⁴。その他にも、官庁の事務員や車掌など、従来女性の領域ではなかった職種に女性が就くことになった⁹⁵。

以上のように、戦中、女性たちは様々な活動を行った。「兵士を鼓舞する存在」としての活動である募兵運動や、軍隊内における家事や事務、看護といった「女性らしい」活動を行った女性たちは、社会が求める理想の女性としての「家庭の天使」であろうとした。一方で、男性の代替要員として従来男性の領域とされてきた職域で労働をしたり、救急車運転手として活動したりするなど、女性たちはジェンダー規範を乗り越えることもあった。「家庭の天使」を求める社会は、ジェンダー規範を揺るがせた女性たちに厳しい視線を向けた。

戦間期になると、戦中に停止していた女性の解放を求める活動が、再び活発になっていった。戦前には過激派による戦闘的行為といった問題を抱えながらも、徐々に支持者を増やしていた女性参政権運動は、第一次世界大戦が始まると停止した。その後 1916 年の夏に運動が再開され⁹⁶、1918 年に女性参政権が賦与された⁹⁷。しかし、女性に与えられた参政権は 30 歳以上という条件がつけられ、男性に与えられた参政権が 21 歳以上という条件であることと比べて、不平等なものだった⁹⁸。結局、男女平等参政権が実現したのは 1928 年のことであった⁹⁹。

1918 年に女性参政権を獲得した後、運動家たちは様々な目標に向かって分裂した¹⁰⁰。目標の 1 つに職に関する問題がある。家庭に押し戻された女性たちは失業した。この問題にフェミニストたちが取り組んだ結果、性別無資格撤廃法が通過した¹⁰¹。この法案は法律関係の分野や会計士が女性にも門戸を開くことを促し¹⁰²、女性の職域拡大に影響を与えた。また、1921 年には公務員職が女性に開かれることが政府から約束された¹⁰³。

職業における男女不平等の問題に加え、家庭に関する問題も解消された。1922 年の財産所有法によって、遺言不在の遺産相続の場合に、男女平等の相続権を持つことが認められた¹⁰⁴。1923 年には、離婚において女性も男性と同様の理由で離婚申請ができるように離婚

法が改正された¹⁰⁵。1925年の幼児後見法では、母親と父親の親権が平等であるとされた¹⁰⁶。しかし、公務員の男女平等賃金、結婚による退職、産児制限などの問題は未解決のままであった¹⁰⁷。

これまで第1章では、戦前、戦中・戦間期の女性について概観してきた。その結果、2つのことが明らかになった。1つ目は、女性たちは戦争を通して「家庭の天使」から「新しい女」へと変化したことである。2つ目は、社会は変わらず女性たちに「家庭の天使」を求め続けたことである。しかし、本当に戦争をきっかけに女性たちは「新しい女」へと変化したのだろうか。

次章からは、従軍看護婦と救急車運転手について描かれた戦間期の作品を用いて、戦中・戦間期の女性像を探り、分析していく。

第2章 『青春の遺言書』とヴェラ・ブリテンの日記において描かれる女性像の考察

本章では『青春の遺言書』と、その作者であるヴェラ・ブリテンの日記において描かれる女性像について考察する。本書は中流階級出身の女性ヴェラ・ブリテンの VAD 隊員としての活動、そして戦後の平和活動について描かれている作品である。

1920年代と、『青春の遺言書』（そして、『西部戦線異状あり—戦争の継娘たち』）が出版された30年代は、ヨーロッパ全体で第一次世界大戦に関する自伝や小説、回想録が出版された時代だった¹⁰⁸。大戦の経験に関する女性の著作も男性と同じく、書き手は、エリート女性から、組織の末端で活動していた女性へと広がっていった¹⁰⁹。ただし、女性の場合、読み書き能力の関係上、労働者階級の書き手は珍しかった¹¹⁰。

『青春の遺言書』のあらすじは以下の通りである。当時の女性としては珍しく自立していた母方の姉妹の影響を受け、ヴェラは大学で学ぶことを志す。しかし、父から反対を受ける。女性は結婚すべきであるという考えや、自分とは違って大学進学を許される弟との差別に怒りを覚えたヴェラは、フェミニズムに関心を持つようにな

る。頑なにヴェラの大学進学を認めなかった父だったが、考えを改めるようになり、ついに1914年、ヴェラはオックスフォード大学に入学することができた。その後、ヴェラは、後に婚約者となるローランド(Roland)と出会い、互いに惹かれ合うものの、第一次世界大戦が勃発すると、ローランドは前線へと身を投じてしまう。また、弟のエドワード(Edward)も父の反対を押し切り、ローランドと同様に出兵を志願する。家庭内の重苦しい空気から逃げるように、ヴェラは看護のクラスに参加するも、何もできない自分に劣等感を抱く。そこで、病院で裁縫の手伝いを始めるが、看護師になりたいと考えるようになり、VADの隊員として数々の病院で看護活動を行う。簡単な家事も知らなかったヴェラだが、一生懸命働くことで、兵士だけでなく、厳しい訓練看護師にも認められる。ところが、戦後の幸せな未来を共に過ごすことを夢見た相手ローランドの訃報が入り、傷ついた心をマルタで癒したヴェラのもとに、友人ヴィクター(Victor)が盲目になったという知らせが来る。ヴェラはヴィクターと結婚し、彼に尽くすことを心に決め、マルタからイギリスに戻るが、ヴィクターも亡くなり、エドワードも戦死する。そして1918年、戦争が終わる。戦後の社会でVADの活動が賞賛される一方で、ヴェラは戦争のせいで自分たちの人生は狂わされてしまったと考える。やがて世間は戦争に携わった女性たちを野蛮だと見

なすようになり、ヴェラは再びフェミニズムに情熱を燃やす。自身の経験を本にして出版するために奔走する中で、ヴェラは平和活動にも力を入れるようになる。

以上のようなあらすじのもと書かれた『青春の遺言書』におけるヴェラの考えや、女性像を「新しい女」という観点から考察すると、「家庭の天使」と「新しい女」のハイブリッドとしての女性像が見えてくる。

先述の通り、ヴェラはオックスフォード大学に進学している。しかし、大学に行きたいと告げたヴェラに対して、父は『『小さな女の子』は自分にとって何が最も良いかを年長者に任せるべきだ¹¹¹』と言って、反対する。また、ヴェラの母が近隣の婦人から「よくも娘を大学に行かせるものですね、ブリテンさん！結婚させたくないのですか¹¹²？」と聞かれる場面もある。このことから、当時女性が結婚もせずに大学に行くことがいかに人々にとって奇妙に映ったかということが分かる。そして、当時、結婚をして家庭を守り、知的好奇心を持たない「家庭の天使」が理想とされていたことが読み取れる。それにもかかわらず、ヴェラは大学進学を諦めることはしない。戦争が始まり、大学に行くことは無駄であると父に言われた際¹¹³、ヴェラは以下のように憤っている。

「私はしばらくの間、怒りと絶望的な憤りに煮えくり返った。長い争いによって、私は憎き地方の監獄から逃れることができたのだが、ヨーロッパの反対側からオーストリア大公に投げつけられたセルビア人の爆弾によって、自由への道が閉ざされてしまった。戦争が私にとって、世界的な大災害というよりもむしろ、ひどく腹立たしい個人的な妨害であったことは、そう驚くべきことでもないだろう¹¹⁴。」

上記から、ヴェラが、父親だけでなく、近隣の人にまで大学進学を否定されたとしても大学で学びたいという意志を持ち続けていたこと、戦争によって大学進学の道を妨害されたことへの怒りという2点を読み取ることができる。この怒りは単なる怒りではなく、激しく持続的なものであったということが、「絶望的な憤り」や「しばらくの間」という部分から分かる。ヴェラは、大学に進学することを「憎き地方の監獄から逃れる」ための手段、「自由への道」として捉えており、ゆえに、周囲に反対されたとしても大学進学を諦めることはない。そして、戦争によって邪魔されたことに対して怒りを露わにする。知的好奇心はふさわしくないとされた「家庭の天使」という女性像に反してでも、ヴェラは大学進学に対する熱意を持っていたのである。

また、ヴェラのもう1つの特徴として、フェミニズムに関心があったということが挙げられる。世紀末の小説において初めて、「新しい女」としてのヒロインを登場させた女性作家¹¹⁵、オリヴァ・シュライナー(Olive Schreiner)の『女性と労働(*Woman and Labour*)』と出会ったことにより、ヴェラはフェミニズムを完全に受け入れることとなったと記している¹¹⁶。彼女のフェミニズムは女性参政権運動家の存在を知ったことでますます強まり、後にオックスフォードの女性参政権協会にも参加している¹¹⁷。

ヴェラのフェミニストとしての傾向は、彼女の交際観や結婚観にもあらわれている。ヴェラは交際について以下のように述べている。

「特に私は、新しい時代の女性の交際について話した。もはや台座の上に置かれ、すべてのことから締め出された天使ではなく、一日を深刻に過ごした夫を癒すための柔らかいクッションや湯たんぽのようなおもちゃでもない¹¹⁸。」

上記から、「家庭の天使」は時代に適さないとヴェラは指摘していることを読み取ることができる。「台座の上に置かれ、すべてのことから締め出された天使」とは、夫に従順で、家庭以外のことを何も知らない存在をあらわしており、「夫を癒すための柔らかいクッション

や湯たんぽのようなおもちゃ」とは、夫を癒す存在をあらわしている。このような特徴を有するのは「家庭の天使」という女性像であり、ヴェラはそれを否定しているのである。また、当時の人々が男女交際に向ける疑いの視線にヴェラは憤りを感じている¹¹⁹。

結婚に関しても、ヴェラはローランドと出会うまでは意欲的ではない。同世代の女の子が愛や結婚、家庭についてばかり考える中で、ヴェラは決してそうではない¹²⁰。プロポーズも断ってしまう¹²¹。ローランドと出会ったことで、結婚したいと考えるようになるが、その結婚観は以下の通りである。

「私のことを付属品としか考えず、人生に不可欠な存在であるとは考えていないような年上の男性によって用意された場所に足を踏み入れるよりも、自分と同じ年の人と結婚して人生を共に歩み、成長を分かち合うことの方がより理想的であると感じている¹²²。」

上記から、ヴェラの結婚観が「新しい女」然としていることが分かる。「私のことを付属品」として見なしている男性との結婚は、男性に従順な「家庭の天使」を求められることであり、それよりも、男性と「人生をともに歩み、成長を分かち合う」ような、男女平等の

結婚生活を求めるヴェラの結婚観は、「新しい女」のものであると言
うことができる。

戦争が終わっても、女性が結婚することは当然であるという価値
観は根強く、両親もヴェラに結婚を望む¹²³。しかし、再び結婚を嫌
がっていたヴェラは以下のように述べている。

「今、私は明確に結婚したくないと感じている。世話をしてく
いた男性は皆死んでしまったし、自立した生活を愛している。私
の人生計画に子供の存在を入れる可能性はもうないと思っていた。
とうとう私はずっと望んでいた生き方を手に入れたのだ
¹²⁴。」

上記から、結婚をして男性の付属品となることを理想とする当時の
結婚観を否定し、自立した生活を求めているヴェラの、「新しい女」
としての姿を読み取ることができる。

また、ヴェラは、必ずしも結婚する必要があるという自身の考え
を周囲に伝えるということもしていた¹²⁵。このようなヴェラの結婚
観を支えるのは、女性の自尊心のためには自由と自活が必要である
という考えである¹²⁶。ヴェラは自立心が強い人物である。そのこと
は、「独り立ちできるようになりたい¹²⁷」、「ローランドの経済的負担

になりたくない¹²⁸」と考えていることから明らかである。

以上のように、自立の必要性を感じているヴェラは、男性の従属物としての「家庭の天使」を求める旧来の結婚観念に否定的であり、男性と同等の立場で女性が自立し、男性とともに成長していくという新しい形の結婚を望ましいと考えていた。

次に、VADの隊員として活動するヴェラの姿を見ていく。ヴェラはVADに入隊したが、VADが主に行った看護は女性にとってふさわしい仕事であった¹²⁹。VADは服装規定も厳しく、ヴィクトリア朝的な価値観に即していた¹³⁰。しかし、ジェンダー規範を越えて、兵士に近い場所で働く女性たちをマスコミが笑いものにすることや¹³¹、戦争に貢献している女性の名前を大学が公表したがるなど¹³²、VADに所属した女性たちは社会が求めるジェンダー規範に振り回された。その一方で、隊員たちのマルタ島での性モラルの低下が描かれるなど¹³³、隊員たちの中には「女性らしさ」が見られない者もいた。では、VAD隊員としてのヴェラはどのように表象されているのだろうか。看護活動をするヴェラの考えには2つの特徴が見られる。

1つ目は、「自分たちの世代は他の世代とは違う」という意識である。ヴェラは自分たちの世代について以下のように述べている。

「私たちの世代はこれまで想像もしなかったような青春時代に生まれた。想像もつかないようなトラブルや災難が私たちを脅かした¹³⁴。」

「戦争は私たちのような若者に最も厳しく降りかかるのだと考えた。中年や老人は楽しい時代を知っている¹³⁵。」

上記から、ヴェラは、自分たちは他の世代とは違うという意識を持っていることが読み取れる。「私たちの世代はこれまで想像もしなかったような青春時代に生まれた」という部分から、ヴェラが、自分たちの世代が経験したことはこれまでに類を見ないものであったと考えていたことが分かる。また、「中年や老人は楽しい時代を知っている」という部分から、特に、年上の世代との距離感を読み取ることができる。これらのことから、ヴェラは、特に年上の世代は戦争によって青春時代が破壊されることの苦しみ分からないのであり、自分たちが最も戦争の悲劇を味わっているのだという、特別感を抱いていることが分かる。

2つ目は、戦場に向かうことができる男性に対する劣等感である。ヴェラは「明らかに、1914年を生きた大勢と同じように、私は劣等感に苦しんでいた¹³⁶」と書き残している。また、以下のようにも述べている。

「私は、働くことで多少なりとも自分自身を保つことができるのだと証明したかったし、男性にはなれず、前線に行くことが叶わないからこそ、次にできる最善のことをしたかった¹³⁷。」

上記から、ヴェラは男性のように前線に行けない性であることに劣等感を感じていたということが分かる。また、前線に行けないからこそ、働くことを通して自立していることを証明したかったという思いを読み取ることができる。

この劣等感は看護活動を通して解消されていくが、病院から家に戻ると再び表面化する。母の看護のために家に戻ったヴェラは、負傷兵に寄り添うのではなく、母の代わりに家事をしている自分に憤りを覚える。

「何より、私には必要のないこと [筆者注：家事] に労力を割いていることに憤りを覚えた。負傷者を生き返らせるという任務のためには、私の若さと健康がとても重要だった¹³⁸。」

この記述から、ヴェラが従軍看護婦としての自負心を抱いていたことが読み取れる。また、従軍看護婦としての務めを果たせていない

ことに対する劣等感や、やるせなさも読み取ることができる。そして、自身が前にいた病院がドイツ軍に襲撃されたと聞いた時、ヴェラはなぜ自分は家にいるのだらうと考える¹³⁹。このことから、ヴェラが自身を銃後とは区別し、兵士に近い場所に位置づけていることが分かる。これは、ヴェラが、マトロン(Matron)¹⁴⁰から「老兵」と呼ばれたことや¹⁴¹、かつて自分が働いていた病院が襲撃を受けたことを聞いて、今その病院ではなく、家にいる自身のことを「脱走兵」だと考えたことから明らかである¹⁴²。

以上のように、ヴェラは大学で学び、フェミニズムに関心を持ち、自身をどの世代とも、銃後とも違う、兵士に近い場所に位置づけ、新しい交際観、結婚観を持っていた。ヴェラのように、VAD 隊員として活動した女性たちも「女らしさ」に縛られていたわけではなかった。そのことは、マルタ島における VAD 隊員の性モラルの低下から明らかである¹⁴³。ヴェラや VAD の隊員から読み取ることができる上記のような女性像は、①結婚をしない、②精神的に自立している、③教育を受けている、④性に奔放である、⑤ジェンダー規範を乗り越えているという 5 点において、「新しい女」の特徴と一致している。ヴェラたちは「新しい女」であると言えるのである。

しかし、ヴェラは決してヴィクトリア朝時代の女性としての一面

を持たないわけではない。「家庭の天使」として、次の3つの価値観も持ち合わせているのである。

1つ目に、ヴェラは性的なことに関して嫌悪感を抱いている。母に性的な事柄について教えてもらったヴェラだったが、「その情報はいつも私にとってひどく不快であり、最も憂鬱なものである¹⁴⁴」と嫌悪感をあらわにしている。また、モーリス(Maurice)という男性がヴェラの首に手を回そうとした時のことを振り返って、「自分より弱く小さい女の子にそのようなことをする権利はない。このような振る舞いをされると、私自身のことも、彼のことも恥ずかしく思う¹⁴⁵」と日記に書き残している。ヴェラは知識としての性的な事柄にすら嫌悪感を抱き、自身が性的に見られることにも不快感を抱いている。このように、ヴェラは「家庭の天使」と同様に、貞節を大切にしていることが分かる。

2つ目に、戦争で苦しむ男性に報いたい、尽くしたいという気持ちである。「私の望みは、戦争における私自身のちっぽけで退屈な役割を、死や痛みで苦しむ立派な彼らのために果たすことだけだ¹⁴⁶」と述べており、ヴェラは、「私の望みは男性に尽くすことである」と考えていることが読み取れる。また、崇拜に近い感謝の気持ちを抱いており¹⁴⁷、戦場で傷ついている男性への態度は、夫を家庭で待ち、癒す理想の妻に通じるものがある。この姿勢は、盲目になったヴィ

クターと結婚すると決めたことにもあらわれている¹⁴⁸。

3つ目は母性である。ヴェラは、「小さくて無力なものを見ると、私はいつも心が痛み、世話をしたいと思う。ああ！私の助けを必要とするものは、命よりも大切だ¹⁴⁹」と述べている。小さくか弱いものを世話したい、命よりも大切だと思ふ気持ちは母性と呼ぶことができる。これは、母性がないとされた「新しい女」とは異なる女性像である。

『青春の遺言書』において描かれたヴェラの姿は、①大学に進学し、②フェミニズムへの関心に付随して「家庭の天使」を求める結婚観を否定し、男女が同等の立場にある新しい結婚観を提示し、③自身を銃後ではなく兵士に近い場所に位置づけ、ジェンダー規範を乗り越えているといった、「新しい女」としての要素を持っている。一方で、①性的なことを嫌悪し、②男性に尽くそうとする気持ちを持っているといった、「家庭の天使」としての要素も持ち合わせている。つまり、ヴェラは当時の「家庭の天使」としての女性像とは異なり、「家庭の天使」と「新しい女」のハイブリッドであると言える。

第3章 『西部戦線異状あり—戦争の継娘たち』において描かれる女性像の考察

本章では『西部戦線異状あり—戦争の継娘たち』において描かれる女性像について考察する。

『西部戦線異状あり—戦争の継娘たち』はエヴァドニ・プライス (Evadne Price) がヘレン・ゼナ・スミスというペンネームで出版した小説である¹⁵⁰。この作品は、1929年に出版されたエーリッヒ・マリア・レマルク (Erich Maria Remarque) の小説、『西部戦線異状なし』のパロディ作品である¹⁵¹。作品の参考として、戦時中に救急車運転手として活動していたウィニフレッド・ヤング (Winifred Young) の日記が使用されている¹⁵²。

『西部戦線異状あり—戦争の継娘たち』のあらすじは以下の通りである。中流階級出身のヘレン・ゼナ・スミスは VAD の救急車運転手である。同じく中流階級出身の女性たちとともに、ヘレンは救急車運転手としての苛酷な任務にあたっている。「イングランドのすばらしい娘 (England's Splendid Daughters)¹⁵³」として自分たちを持つてはやす新聞や母に、ヘレンは不信感を抱いている。母は募兵活動に熱心で、いかに多くの兵士を前線に送り込むことができるか、と

いうことばかり考えている。ヘレンはそんな母に対して反発心を持つようになっていた。ヘレンが反発心を抱く相手は同じ救急車運転手の中にもいる。ミセス・ビッチ (Mrs. Bitch) である。ミセス・ビッチは、規則に厳しく、少しでも規則を破れば、罰則を与えてくる。救急車運転手の仕事は非常に過酷であり、ヘレンは深夜にライトもつけずに険しい道を運転し、負傷した兵士たちの呻き声を聞き続けなければならなかった。朝になれば兵士たちが残した汚物を掃除しなければならず、ろくに休むこともできない。このような状況下でのミセス・ビッチの厳しすぎる指導は、ヘレンと仲間たちの精神を徐々にすり減らしていった。1人、また1人と仲間たちが部隊から姿を消す中、ヘレンが憧憬を抱いていた救急車運転手仲間のトッシュ (Tosh) が死んでしまう。この出来事以後、負傷した兵士たちの幻覚を見るようになったヘレンは、結局、救急車運転手を辞めてしまう。家族は救急車運転手を辞めたヘレンに冷たく、いつ活動に戻るのかと尋ねてくる。ヘレンは戻る気はないと訴えるが、家族はそんなヘレンに対して怒りを露わにする。ある日、妹のトリックス (Trix) から墮胎手術のためのお金を貸してほしいと頼まれる。ヘレンはフランスに戻るからお金を用意してほしいと叔母に頼み、工面する。そして、ヘレンは陸軍女性補助部隊の家政婦として再びフランスに赴く。しかし、ヘレンたちが避難していた塹壕が爆撃を受け、ヘレ

ンだけが生き残ってしまう。

以上のようなあらすじのもと書かれた『西部戦線異状あり—戦争の継娘たち』におけるヘレンたちの姿を通して、当時の女性像を「新しい女」という観点から考察すると、「家庭の天使」から「新しい女」へと変化したヘレンという女性像が見えてくる。

本作品において描かれる社会においても、国や男性に尽くす女性が求められていた。本作品では、ヘレンたちのような女性を表象する単語として、「イングランドのすばらしい娘」というものが使われている。また、「英国のヒロイン(English-hearted heroine)¹⁵⁴」と母から呼ばれるなど、ヘレンや妹のトリックスは国に尽くす立派な女性として表現されている。ロンドンにいる本部の権力者が戦争のために洗練された女性を必要としていることは、以下のヘレンの独白から読み取ることができる。

「ロンドンの権力者たちが、この救急車運転手という仕事に、きちんとした教育を受けた洗練された女性が必要だと規定していることは驚きだ¹⁵⁵。」

上記から、救急車運転手として働く女性に対して、洗練された女性、すなわち教育を受けた女性を国が求めていたことが分かる。

世間から「英国のヒロイン」、「素晴らしい娘」、「洗練された女性」としてもてはやされるヘレンたちだが、ヘレンはそのように表象されることに疑問を抱いている。

『「私たちはすべきことをしなければならない。」…彼らは私をヒロイン、イングランドの素晴らしい娘の1人に仕立て上げたけれど、私は恐怖に震え、ハンドルを握ることもできない…¹⁵⁶』

実際のヘレンは血や汚れに委縮しており、自らを奮い立たせることができない¹⁵⁷。世間が言うような「素晴らしい娘」とは自らの役割を全うする娘のことである。恐怖に震え、救急車運転手としての役割を果たすことに困難を感じている自身を、ヘレンは「素晴らしい娘」ではないと見なしていた。

前線と銃後の認識の乖離に気付いたヘレンは、やがて銃後は何も分かっていないと考えるようになる。救急車運転手の仕事について書かれた記事「我々の素晴らしい女性(Our Splendid Women)」を読んだヘレンは、「朝食のテーブルで何不自由なくこの記事を読んでいる一体どれだけの人が『掃除のすべて』が何なのかを理解しているのだろうか¹⁵⁸」と疑問を持つ。そして、「我々の素晴らしい戦争少女(our wonderful war girls)」としてヘレンたちの不屈の精神と高い気

力を賞賛する記事を読んだ時、ヘレンは怒りを抱く¹⁵⁹。ヘレンと銃後との確執は、母への感情にもあらわれている。銃後で男性を前線に送り出すことに躍起になっている母のような女性を生む限り、戦争は繰り返されるとヘレンは考えている¹⁶⁰。VADで看護師として働いている妹のトリックスも母に呆れを覚えている¹⁶¹。

また、ヘレンはヴェラと同様に、他の世代とは違うという意識も持っている。

「次の世代・・・・・・・・私たちの弟や妹たち・・・・・・・・血と憎しみの空気の中で育った若者たちは厳しく、非情で、冷たい・・・・・・・・感情がなく、非友好的で、残酷、分析的でがめつく、彼らの子供時代から脚光を奪った私たちに恨み、戦争と、戦う男女に飽き飽きとしていて、私たちが苦勞をして得た自由を何のありがたみもなく奪う・・・・・・・・¹⁶²」

上記から、ヘレンは年下の世代とは違うという意識を持っていることが分かる。「次の世代・・・・・・・・(中略)子供時代から脚光を奪った私たちに恨み」という部分、そして「私たちが苦勞して得た自由を、何のありがたみもなく奪う」という部分から、年下の世代がヘレンたちの世代の苦しみを理解することも、そして、戦争を知ら

ない年下の世代を肯定的に捉えることもできないとヘレンが考えていることが読み取れる。ヴェラと同様にヘレンもまた、他の世代とは違うという意識を持っているが、年上の世代との断絶感を強く感じているヴェラとは対照的に、ヘレンは年下の世代との断絶感を感じている。

銃後と対立し、自分たちの世代を他とは切り離しているヘレンはヴェラと同じく、自らを兵士に近い場所に位置づけている。そのことは、兵士に対して「可哀想に、私と同じように寒くて、不幸で、ホームシックなのだろうか¹⁶³？」と考えていることから読みとることができる。ヘレンは自分と兵士を重ね合わせているのである。

他の世代に対する意識に加え、『西部戦線異状ありー戦争の継娘たち』では、『青春の遺言書』と同じく、女性の性モラルについても描かれている。それどころか、その内容は『青春の遺言書』に比べ、より過激なものになっている。例えばヘレンは救急車運転手を辞めた後、偶然出会った男性と肉体関係を持つ¹⁶⁴。また、妹のトリックスは妊娠するが、父親が誰かは分からない¹⁶⁵。ヘレンは、職場における貞節は単なる時間の浪費であり、美德は貞節と同じようにちっぽけなものだと述べる¹⁶⁶。以上のような、性モラルが低下し、貞節や純潔を軽視するヘレンは「女性らしさ」を失っており、性に奔放な「新しい女」の姿と一致している。

「新しい女」であるヘレンは過去の自分を振り返り、現在の自分が変化してしまったことを認めている。

「司令官の警笛[筆者注：ミセス・ビッチが吹く警笛のこと]は私の戦前の気質を完全に壊している。私の中のありとあらゆる下劣さを目覚めさせるのである。少し前まで、私は特に美德も悪徳もない、穏やかで柔軟な生き物だった。気性は平静で、性格は愛想がよく、感情の起伏はほとんどなかった。今の私は陰気で怒りにくすぶっており、ともすれば、少しの前触れもなくベスビオ火山のように怒りの炎を爆発させる¹⁶⁷。」

以上に描かれているような、怒りっぽいヘレンの姿は、精神的に不安定であるとされる「新しい女」に通じるものがある¹⁶⁸。そして、自らを「無駄に野蛮になってしまった¹⁶⁹」と評するヘレンはどうとう髪を切ってしまう¹⁷⁰。

以上のように、銃後が称える女性像との乖離を感じ、自らを兵士に近い場所に位置づけ、時には兵士と自身を重ね合わせ、貞節や温厚さといった「女性らしさ」を失ったヘレンは「新しい女」であると言える。

では、ヘレンはヴェラと同じように「家庭の天使」としての側面

も持ち合わせているのだろうか。以下で見ていくように、「家庭の天使」と「新しい女」のハイブリッドであったヴェラとは異なり、ヘレンは戦争を通して、「家庭の天使」から「新しい女」へと変化している。過酷な仕事を乗り越えるため、ヘレンたち救急車運転手は、兵士たちの苦しみを和らげるのだと、自らを奮い立たせている¹⁷¹。また、「兵士を助けるためにフランスに来た¹⁷²」とも述べており、男性を助けることが自分たちの役割なのだと考えている。このことは、男性に尽くすことを求められていた「家庭の天使」の特徴と合致する。

一方で、「ショートヘアは女性らしくない¹⁷³」と考えながらも、散髪をし、不清潔な状態や空腹のような、前線の兵士と変わらない状況に慣れていくなど¹⁷⁴、かつて「家庭の天使」だった女性が次第に「新しい女」へと変化しているということを読み取ることができる。

以上のように、『西部戦線異状あり—戦争の継娘たち』において描かれたヘレンの姿に注目すると、「家庭の天使」としての要素を持つ「女性らしい」女性だったが、救急車運転手としての活動を通して「新しい女」へと変貌していく様子が見られる。つまり、「家庭の天使」から「新しい女」への女性像の変化を読み取ることができるのである。

第2章と第3章を通して、ヴェラとヘレンから読み取ることので

きる女性像について考察してきた。「家庭の天使」と「新しい女」両方の要素を持つハイブリッドであるヴェラと比較して、ヘレンは「家庭の天使」から「新しい女」へと変化したという違いがあるということが分かった。特に顕著に違いがあらわれているのは、性的モラルである。ヴェラは性的なことへの嫌悪感を抱いており、貞節を大切にしていたが、ヘレンは性的に奔放な面を見せている。貞節という「家庭の天使」の要素を持ち続けたヴェラは「新しい女」とのハイブリッドであり、それを失ったヘレンは「新しい女」へと変化したのである。

おわりに

第2章、第3章において、ヴェラ・ブリテンによる『青春の遺言書』と日記、ヘレン・ゼナ・スミスによる『西部戦線異状あり—戦争の継娘たち』から読み取ることのできる女性像について分析してきた。そこから明らかになった女性像を、戦前から戦間期の女性像の変化と照らし合わせてそれぞれ分析し、本論文のまとめとする。

『西部戦線異状あり—戦争の継娘たち』から見えてきた女性像は、「家庭の天使」から「新しい女」へと変化した女性であった。これは、戦前から戦間期の女性像の移り変わりとは一致している。戦前から戦間期の女性像の移り変わりは以下の通りである。

戦前、女性たちは社会から「家庭の天使」として表象された。「家庭の天使」とは、仕事で疲れて帰って来る男性を癒すための家庭を作り、慎み深く、貞節を守り、男性に尽くす従順な「女性らしい」女性のことである。女性たち自身もそのような女性像を守っていた。しかし、「女余り現象」が起きたことで、結婚ができない女性が現れた。そのような女性たちがジェンダー規範を揺るがせた結果、「新しい女」が登場した。「新しい女」とは、精神的に自立しており、性に奔放で、母性がなく、ジェンダー規範を乗り越える女性である。社

会によって生み出された「新しい女」は、社会から望ましくない女性として扱われた。

戦中、社会は女性たちに兵士を鼓舞する存在、未来の兵士を産む母、あるいは「家庭の天使」としての女性像を求めた。戦前に現れ始めた「新しい女」の代表例とも言える女性参政権運動家たちも、運動を停止し、国のために尽くした。女性たちは愛国心を表明するため、男性の領域であった職域に足を踏み入れ、軍事的な部隊に入隊するなど、ジェンダー秩序を越えた活躍を見せたが、「女性らしさ」を求める男性への配慮が行われた。しかし、中には性モラルや「女性らしさ」を失った女性の姿も見られた。

戦間期、戦中にジェンダー規範を乗り越えた女性たちは「家庭の天使」から抜け出し、「新しい女」へと変化した。しかし、社会はそのような女性たちに対して厳しい視線や批判を送り、「家庭の天使」としての女性を求め続けた。

以上のことをまとめると、社会は戦前から戦間期まで、一貫して「家庭の天使」としての女性像を女性に求め続けていることが分かる。他方、女性たち自身は、戦争を通して「家庭の天使」から「新しい女」へと変化したことが分かる。

一方で、『青春の遺言書』とヴェラ・ブリテンの日記から見えてきた女性像は、「家庭の天使」と「新しい女」のハイブリッドとしての

女性像だった。これは、「家庭の天使」から「新しい女」へと変化した女性たちの姿とも、社会が一貫して求め続けた「家庭の天使」とも異なる女性像である。

なぜ、同じ組織での経験を描いた作品でありながら、異なる女性像が浮かび上がってくるのだろうか。その背景には、従軍看護婦と救急車運転手の違いがあるであろう。ヴェラは VAD の従軍看護婦として「女性らしい」戦争貢献を行っている。一方で、ヘレンは VAD の救急車運転手というジェンダー規範を乗り越えた戦争貢献を行っている。戦前は男性の領域であった場所で労働をし、陸軍女性補助部隊のような部隊に入隊した女性たちもまた、男性の代替要員となり、「女性らしさ」を失ったとして批判された。つまり、男性の領域に入った女性たちは、最早「家庭の天使」ではなく、男性と同様に性的にも精神的にも自立可能な「新しい女」となり、社会からもそう見なされたのである。だからこそ、男性の領域ではなく、「女性らしい」貢献に従事したヴェラ・ブリテンは「新しい女」になりきることができなかつたのではないかと考察する。

さらに、ヴェラがフェミニストであったことと、信心深い家庭の出身であったことが、ヴェラの特異性の背景にあるのではないかと考察する。ヴェラのフェミニズムが特に顕著にあらわれているのは、ヴェラの結婚観である。ヴェラは、ローランドとの結婚を考えるよ

うになっても、彼の経済的負担にならないために自分自身を養えるようになるまで、彼と結婚はしないと日記に記している¹⁷⁵。女性の自尊心のためには自由と自活こそが唯一の条件であり¹⁷⁶、結婚はそれを妨げるのである。「家庭の天使」として家に閉じこもり、男性に依存するような結婚生活をヴェラは否定し、自尊心のためにも働くことが必要だとヴェラは考えているのである。男性に従属するのではなく、男性と同様に働くことを理想とするヴェラの考えは、「女性が男性と同じ権利、同じ機会、同じ報酬を持つことを擁護¹⁷⁷」するというリベラル・フェミニズムと通じるものがあり、ヴェラの「新しい女」としての側面を明確にあらわしている。

また、ヴェラのこのような考えから、戦中における男性との出会いによって結婚を望むようになったにも関わらず、戦間期において再び結婚への拒否感を示した背景には、戦間期の性差別の撤廃が関係していると考察できる。第1章で概観したように、戦間期、フェミニストたちは性差別をなくすために尽力した。男女が同等の理由で離婚できるようになり、参政権が平等になり、女性の職域が徐々に拡大した当時の社会の動きの影響をヴェラが受けたのであろう。その結果、ヴェラが「新しい女」然とした結婚観を持ち、「結婚した女性に専門的な仕事をさせないという制限は反生物学的であり、ほとんど民族の自殺のようなものだ¹⁷⁸」という考えを持ち、女性の地

位の平等のための運動に価値を見出すに至るのである¹⁷⁹。

一方で、ヴェラは性的なことへの嫌悪感を抱いている。これは、ヴェラが信心深い中流階級の出身であったことが関係しているのではないかと推察される。厳格な父の一家は信心深く、ヴェラも日常的にその影響を受けていた¹⁸⁰。礼拝に行く様子も見られる¹⁸¹。福音主義の影響が根強い中流階級の中でも、ヴェラの家は特にキリスト教的な価値観が染みついていたと思われる。故に、ヴェラは「家庭の天使」に求められるような貞節や純潔を捨て去ることができなかつたと考えられる。フェミニストとしての一面や、信心深い一面といった要因が合わさり、ヴェラは「家庭の天使」でもなく、「新しい女」でもない、ハイブリッドな女性として描かれたと考えられる。

本論文で分析してきた『青春の遺言書』と『西部戦線異状ありー戦争の継娘たち』は、どちらも VAD という組織に所属した女性を題材にした作品でありながらも、2つの作品からは、異なる女性像が見えてきた。しかし、共通点が2つ見受けられる。

1つ目は、世代間対立である。ヴェラもヘレンも、自らの世代と他の世代を明確に区別しており、時には断絶感を抱いている。このことは、戦間期に見られた世代間の対立という現象の影響が見られる。ハインズは、戦時中に、戦争を起こした老人と戦争で死んでいった若者という対立構造が見られるようになり、さらに、戦後には

老人と若者という二項対立だけではなく、様々な形での対立が見られるようになったと指摘している¹⁸²。自分たちの知らない青春を知っている年上の世代に対するヴェラの反感は、ハインズが指摘する「老人と若者の対立」に通じる部分がある。また、ヘレンが特に年下の世代には自分たちの世代の苦しみを理解されることはないと一線を引いている様子は、ハインズが指摘する戦後の対立の形の1つであると言うことができ、作品において描かれた世代間対立と、戦中・戦後の社会において見られた世代間対立の関連性を読み解くことができるであろう。

2つ目は、訓練看護師との対立である。ヴェラは訓練看護師がVADの看護師たちの力量を疑っていたことや¹⁸³、冷酷な看護師に対する反発心を書き残している¹⁸⁴。ヘレンの妹で、VADで活動していたトリックスも、訓練看護師がVADの看護師に対して意地悪であることや¹⁸⁵、戦後に仕事を奪われると考えている訓練看護師への冷ややかな反応をヘレンへの手紙に書き記している¹⁸⁶。このことから、両作品においてVADの看護師と訓練看護師の対立が共通して描かれていることが分かる。そして、労働者階級が多かった訓練看護師と、上・中流階級が多かったVADの看護師の対立には、戦後の社会において見られた階級意識が強まったことの影響があると考えられる。今井は、鉄鋼などの伝統産業が戦後に衰退し、化学工業

などへと移行したことから労使関係が厳しくなり、階級意識が強化されたことを指摘している¹⁸⁷。その結果、戦前に階級の垣根を越えて女性参政権運動に従事した女性たちは、再び中流階級と労働者階級に分裂し、戦後の女性運動が混乱することになったのである¹⁸⁸。このような戦後の階級間の対立や分断の構図は、作品において描かれた看護師同士の対立の構図と共通しており、関連性があると言えるだろう。

とはいえ、ヴェラに関しては、戦前から戦間期の女性像の変化に当てはめることのできない、新しい女性像を提示している。果たして、その特殊性はヴェラにのみ見られるものなのか、それとも他の従軍看護婦にも共通して見られるものなのかという分析は今後の課題としたい。

¹ 林田敏子「警察とジェンダー—20世紀イギリスにおける女性警察—」、『歴史学研究』、860号、2009年、26ページ。

² 林田敏子「制服の時代とイギリス—ジェンダー・セクシュアリティ・第一次世界大戦—」、『西洋史学』、231号、2008年、47ページ。

³ 今井けい『イギリス女性運動史—フェミニズムと女性労働運動の結合—』、日本経済評論社、1992年、284ページ。

⁴ 大嶽秀夫『フェミニストたちの政治史—参政権、リブ、平等法—』、東京大学出版会、2017年、21ページ。

-
- 5 林田敏子「第一次世界大戦の記憶とジェンダー—イギリスにおける帝国戦争博物館と女性労働小委員会—」、『西洋史学』、267号、2019年、37ページ。
- 6 林田敏子「軍隊のなかの女性たち—回想録から読み解く第一次世界大戦の記憶—」、『寧楽史苑』、67号、2022年、33ページ。
- 7 林田「軍隊のなかの女性たち」、33ページ。
- 8 荒木映子『ナイチンゲールの末裔たち—〈看護〉から読みなおす第一次世界大戦』、岩波書店、2014年、7ページ。
- 9 林田「制服の時代とイギリス」。
- 10 荒木『ナイチンゲールの末裔たち』。
- 11 Samuel Hynes, *A War Imagined: The First World War and English Culture*, London, 1990; reedition, Pimlico, 1992, p. ix.
- 12 今井『イギリス女性運動史—フェミニズムと女性労働運動の結合—』、278ページ。
- 13 吉田恵子「第一次世界大戦と英国婦人労働者」、『明治大学短期大学紀要』、33号、1983年。
- 14 Sandra M. Gilbert, “Soldier’s Heart: Literary Men, Literary Women, and the Great War”, in Sandra M, Gilbert/Susan Gubar, *No Man’s Land: The Place of the Woman Writer in the Twentieth Century, Volume 2: Sexchanges*, Yale University Press, 1989, pp. 279-280.
- 15 Sharon Ouditt, *Fighting Forces, Writing Women: Identity and Ideology in the First World War*, Routledge, 1994, p. 32.
- 16 林田「制服の時代とイギリス」、43-44ページ。
- 17 林田「軍隊のなかの女性たち」。
- 18 荒木『ナイチンゲールの末裔たち』、50ページ。
- 19 荒木『ナイチンゲールの末裔たち』、69ページ。
- 20 荒木『ナイチンゲールの末裔たち』、8ページ。
- 21 Vera Brittain, *Chronicle of Youth: Great War Diary 1913-1917*, Ed. Alan Bishop, The Camelot Press Ltd, 1981.

-
- 22 荒木『ナイチンゲールの末裔たち』、9 ページ。
- 23 川本は、フィクションにおける女性像の反映について、「小説のヒロインとは原則的に時代の理想の女性である。ヒロインには、時の社会が望ましいと考える女性像が、ポジあるいはネガのかたちで投影されているのだ」と指摘した。(川本静子『〈新しい女〉たちの世紀末』、みすず書房、1999 年、7-8 ページ。)
- 24 マイケル・ウィットワース『時代のなかの作家たち 2 ヴァージニア・ウルフ』、窪田憲子訳、彩流社、2011 年、96 ページ。
- 25 武田美保子『〈新しい女〉の系譜—ジェンダーの言説と表象』、彩流社、2003 年、17 ページ。
- 26 三井淳子「子育て支援体制の構築をめざして—世紀転換期の母親たちのネットワーク」、伊藤航多、佐藤繭香、菅靖子編『欲ばりな女たち—近現代イギリス女性史論集』、彩流社、2013 年、207 ページ。
- 27 今井『イギリス女性運動史—フェミニズムと女性労働運動の結合—』、23 ページ。
- 28 今井『イギリス女性運動史—フェミニズムと女性労働運動の結合—』、22-23 ページ。
- 29 河村貞枝『イギリス近代フェミニズム運動の歴史像』、明石書店、2001 年、247、250、251、253 ページ。
- 30 河村『イギリス近代フェミニズム運動の歴史像』、15 ページ。
- 31 河村『イギリス近代フェミニズム運動の歴史像』、251 ページ。
- 32 河村『イギリス近代フェミニズム運動の歴史像』、251-252 ページ。
- 33 河村『イギリス近代フェミニズム運動の歴史像』、247 ページ。
- 34 河村『イギリス近代フェミニズム運動の歴史像』、247、254 ページ。
- 35 当時の労働者階級の生活について、河村は次のように説明している。「十九世紀の末には、比較的余裕のある「リスペクタブル」な労働者は自らの妻や子どもたちをある程度の安楽さの中で扶養す

ることを志向した。女性の「家庭性」を強調する中流階級の理想が社会の階梯の下方まで浸透する力を有したことは、労働者階級の上層部分の「優位模倣」によって明らかに示されるであろう。」(河村『イギリス近代フェミニズム運動の歴史像』、246 ページ。)；マーシュは国勢調査から、1881 年と比較して、1901 年の方が職を持った既婚女性の数が少なかったことを指摘しており、そのことから社会全体で女性が夫に扶養されるようになったことが読み取れる。(David C. Marsh, *The Changing Social Structure of England and Wales 1871-1961*, London, 1958; reedition, Routledge, 1998, p. 128.)

³⁶ Joan N. Burstyn, *Victorian Education and the Ideal of Womanhood*, BARNES & NOBLE BOOKS, 1980, p. 57.

³⁷ 川本『〈新しい女〉たちの世紀末』、7 ページ。

³⁸ 武田『〈新しい女〉の系譜』、22 ページ。

³⁹ 武田『〈新しい女〉の系譜』、30-31、49 ページ。

⁴⁰ 杉村使乃『制服ガールの総力戦—イギリスの「女の子」の戦時貢献』、春風社、2021 年、41 ページ。

⁴¹ E. ショウォールター『性のアナーキー—世紀末のジェンダーと文化』、富山太佳夫、永富久美、上野直子、坂梨健史郎共訳、みすず書房、2000 年、68-69 ページ。

⁴² 武田『〈新しい女〉の系譜』、31 ページ。

⁴³ 武田『〈新しい女〉の系譜』、17 ページ。

⁴⁴ ショウォールター『性のアナーキー』、30 ページ。

⁴⁵ ショウォールター『性のアナーキー』、30 ページ。

⁴⁶ 武田『〈新しい女〉の系譜』、18 ページ。

⁴⁷ ジューン・パーヴィス『MINERVA 西洋史ライブラリー^③ ヴィクトリア時代の女性と教育—社会階級とジェンダー—』、香川せつ子訳、ミネルヴァ書房、1999 年、81 ページ。

⁴⁸ リチャード・オールドリッチ『イギリスの教育—歴史との対話』、松塚俊三、安原義仁監訳、玉川大学出版部、2001 年、35 ページ。

-
- 49 例えば、ロンドン大学は 1878 年に、すべての試験と学位において女性を受け入れた。(滝内大三『大阪経済大学研究業書 第 61 冊 女性・仕事・教育—イギリス女性教育の近現代史—』、晃陽書房、2008 年、37 ページ。)
- 50 武田『〈新しい女〉の系譜』、33-34 ページ。
- 51 川本『〈新しい女〉たちの世紀末』、31 ページ。
- 52 大嶽『フェミニストたちの政治史』、13 ページ。
- 53 佐藤繭香『イギリス女性参政権運動とプロパガンダーエドワード朝の視覚的表象と女性像』、彩流社、2017 年、21-22 ページ。
- 54 河村『イギリス近代フェミニズム運動の歴史像』、111-112 ページ。
- 55 レイ・ストレイチー『イギリス女性運動史 1792-1928』、栗栖美知子、出淵敬子監訳、みすず書房、2008 年、251-252 ページ。(この文献は参考文献のみリスト化されており、引用部分の参考元が不明瞭である)
- 56 ストレイチー『イギリス女性運動史』、254 ページ。
- 57 ストレイチー『イギリス女性運動史』、258 ページ。
- 58 ストレイチー『イギリス女性運動史』、258 ページ。
- 59 河村『イギリス近代フェミニズム運動の歴史像』、117 ページ。
- 60 佐藤『イギリス女性参政権運動とプロパガンダ』、204-205 ページ。
- 61 ストレイチー『イギリス女性運動史』、176 ページ。
- 62 荒木『ナイチンゲールの末裔たち』、101-102 ページ。
- 63 ストレイチー『イギリス女性運動史』、176 ページ。
- 64 荒木『ナイチンゲールの末裔たち』、101 ページ。
- 65 荒木映子『第一次世界大戦とモダニズム—数の衝撃』、世界思想社、2008 年、56-57 ページ。
- 66 荒木『第一次世界大戦とモダニズム』、57 ページ。
- 67 林田敏子「研究のあゆみ—大戦史の「ジェンダー的転回」へ向けて—」、『家政学研究』、67 巻 2 号、2021 年、30 ページ。(この

論文は林田の研究成果のまとめであり、引用部分の参考元が不明瞭である)

⁶⁸ 林田「研究のあゆみ」、30 ページ。

⁶⁹ 林田「軍隊のなかの女性たち」、40 ページ。

⁷⁰ Janet S. K. Watson, *Fighting Different Wars: Experience, Memory, and the First World War in Britain*, Cambridge University Press, 2004, p. 8.

⁷¹ 林田「警察とジェンダー」、26 ページ。

⁷² 林田「警察とジェンダー」、26 ページ。

⁷³ 林田「軍隊のなかの女性たち」、47 ページ。

⁷⁴ 例えば、夫を亡くしたばかりの女性が遺体の運び出しをするよりも前に用務員の軍曹と睦み合うなど。(Vera Brittain, *Testament of Youth: an autobiographical study of the years 1900-1925*, London, 1933; reedition, Ed. Mark Bostridge, Prabhat Prakashan, 2019, p. 405.) (Kindle 版) (ページ数は位置ナンバーではなく、本文のページ数に依拠している)

⁷⁵ 林田敏子『レクチャー 第一次世界大戦を考える 戦う女、戦えない女—第一次世界大戦期のジェンダーとセクシュアリティ』、人文書院、2013年、111 ページ。(この文献は参考文献のみリスト化されており、引用部分の参考元が不明瞭である)

⁷⁶ 林田「軍隊のなかの女性たち」、46 ページ。

⁷⁷ 今井けい『現代イギリス女性運動史—ジェンダー平等と階級の平等』、ドメス出版、2016年、162 ページ。

⁷⁸ 今井『現代イギリス女性運動史—ジェンダー平等と階級の平等』、162 ページ。

⁷⁹ ストレイチャー『イギリス女性運動史』、328 ページ。

⁸⁰ 今井『現代イギリス女性運動史—ジェンダー平等と階級の平等』、163 ページ。

⁸¹ 林田「制服の時代とイギリス」、43 ページ。

⁸² Brittain, *Testament*, p. 490.

-
- 83 Brittain, *Testament*, p. 475.
- 84 ストレイチャー『イギリス女性運動史』、330-331 ページ。
- 85 今井『イギリス女性運動史－フェミニズムと女性労働運動の結合－』、315 ページ。
- 86 フォルカー・ベルクハーン『第一次世界大戦 1914-1918』、鍋谷郁太郎訳、東海大学出版部、2014年、79 ページ。(この文献は参考文献のみリスト化されており、引用部分の参考元が不明瞭である)
- 87 林田『戦う女、戦えない女』、31-32 ページ。
- 88 荒木『ナイチンゲールの末裔たち』、50 ページ。
- 89 Ouditt, *Fighting Forces, Writing Women*, p. 11.
- 90 荒木『ナイチンゲールの末裔たち』、50 ページ。
- 91 荒木『ナイチンゲールの末裔たち』、122 ページ。
- 92 林田「軍隊のなかの女性たち」、34 ページ。
- 93 荒木『ナイチンゲールの末裔たち』、124 ページ。
- 94 吉田「第一次世界大戦と英国婦人労働者」、65-67 ページ。
- 95 吉田「第一次世界大戦と英国婦人労働者」、59 ページ。
- 96 ストレイチャー『イギリス女性運動史』、300 ページ。
- 97 今井『現代イギリス女性運動史－ジェンダー平等と階級の平等』、158 ページ。
- 98 今井『現代イギリス女性運動史－ジェンダー平等と階級の平等』、158 ページ。
- 99 林田「制服の時代とイギリス」、43-44 ページ。
- 100 今井『現代イギリス女性運動史－ジェンダー平等と階級の平等』、156 ページ。
- 101 今井『現代イギリス女性運動史－ジェンダー平等と階級の平等』、177-178 ページ。
- 102 今井『現代イギリス女性運動史－ジェンダー平等と階級の平等』、178 ページ。
- 103 ストレイチャー『イギリス女性運動史』、322 ページ。

-
- 104 ストレイチャー『イギリス女性運動史』、323 ページ。
- 105 今井『現代イギリス女性運動史—ジェンダー平等と階級の平等』、170-171 ページ。
- 106 今井『現代イギリス女性運動史—ジェンダー平等と階級の平等』、185 ページ。
- 107 今井『現代イギリス女性運動史—ジェンダー平等と階級の平等』、185 ページ。
- 108 林田「軍隊のなかの女性たち」、36 ページ。
- 109 林田「軍隊のなかの女性たち」、36 ページ。
- 110 林田「軍隊のなかの女性たち」、36 ページ。
- 111 Brittain, *Testament*, p. 52. (なお、日本語訳に際して、荒木『ナイチンゲールの末裔たち』；上田敦子「戦争は私の信念を裏切り、私の愛を嘲った」—ヴェラ・ブリテンの『青春の遺言書』と『暗い満ち潮』を中心に)、河内恵子編『西部戦線異状あり—第一次世界大戦とイギリス女性作家たち』、慶応義塾大学出版会、2011年、157-183 ページを参考にしている。)
- 112 Brittain, *Testament*, p. 73.
- 113 Brittain, *Testament*, p. 92.
- 114 Brittain, *Testament*, p. 93.
- 115 川本『〈新しい女〉たちの世紀末』、46 ページ。
- 116 Brittain, *Testament*, p. 41.
- 117 Brittain, *Testament*, p. 58, 109.
- 118 Brittain, *Chronicle*, p. 75.
- 119 Brittain, *Testament*, p. 28.
- 120 Brittain, *Chronicle*, p. 282.
- 121 Brittain, *Chronicle*, p. 39.
- 122 Brittain, *Chronicle*, p. 111.
- 123 Brittain, *Testament*, p. 545.
- 124 Brittain, *Testament*, p. 608.
- 125 Brittain, *Testament*, p. 549.

-
- ¹²⁶ Brittain, *Testament*, p. 536.
- ¹²⁷ Brittain, *Chronicle*, p. 165.
- ¹²⁸ Brittain, *Chronicle*, p. 237.
- ¹²⁹ Ouditt, *Fighting Forces, Writing Women*, p. 17.
- ¹³⁰ Brittain, *Testament*, p. 453.
- ¹³¹ Brittain, *Testament*, p. 149.
- ¹³² Brittain, *Chronicle*, p. 295.
- ¹³³ Brittain, *Testament*, p. 327.
- ¹³⁴ Brittain, *Chronicle*, p. 96.
- ¹³⁵ Brittain, *Testament*, p. 129.
- ¹³⁶ Brittain, *Testament*, p. 104.
- ¹³⁷ Brittain, *Testament*, pp. 213-214.
- ¹³⁸ Brittain, *Testament*, p. 430.
- ¹³⁹ Brittain, *Testament*, p. 432.
- ¹⁴⁰ 看護婦長のことである。(matron: 竹林滋ほか編『研究社 新英和大辞典』、第6版、研究社、2002年、1527ページ。)
- ¹⁴¹ Brittain, *Testament*, p. 373.
- ¹⁴² Brittain, *Testament*, p. 433.
- ¹⁴³ Brittain, *Testament*, p. 327.
- ¹⁴⁴ Brittain, *Chronicle*, p. 30.
- ¹⁴⁵ Brittain, *Chronicle*, p. 27.
- ¹⁴⁶ Brittain, *Testament*, p. 340.
- ¹⁴⁷ Brittain, *Testament*, p. 165.
- ¹⁴⁸ Brittain, *Testament*, p. 347.
- ¹⁴⁹ Brittain, *Chronicle*, p. 56.
- ¹⁵⁰ Jane Marcus, “Afterword: Corpus/Corps/Corpse: Writing the Body in/at War,” in Helen Zenna Smith, *Not So Quiet...Stepdaughters of War*, London, 1930; reedition, The Feminist Press, 1989, p. 262.
- ¹⁵¹ Marcus, “Afterword”, p. 266.

-
- ¹⁵² Marcus, “Afterword”, p. 266.
- ¹⁵³ Helen Zenna Smith, *Not So Quiet...Stepdaughters of War*, London, 1930; reedition, The Feminist Press, 1989, p. 13. (なお、日本語訳に際して、荒木『ナイチンゲールの末裔たち』；河内恵子「母と娘が紡ぐ残酷物語—ヘレン・ゼナ・スミスの『西部戦線異状あり—戦争の継子たち』を読む」、河内編『西部戦線異状あり—第一次世界大戦とイギリス女性作家たち』、211-241 ページを参考にしている。)
- ¹⁵⁴ Smith, *Not So Quiet*, p. 84.
- ¹⁵⁵ Smith, *Not So Quiet*, p. 50.
- ¹⁵⁶ Smith, *Not So Quiet*, p. 34.
- ¹⁵⁷ Smith, *Not So Quiet*, p. 89.
- ¹⁵⁸ Smith, *Not So Quiet*, p. 60.
- ¹⁵⁹ Smith, *Not So Quiet*, pp. 134-135.
- ¹⁶⁰ Smith, *Not So Quiet*, p. 90.
- ¹⁶¹ Smith, *Not So Quiet*, p. 177.
- ¹⁶² Smith, *Not So Quiet*, pp. 166-167.
- ¹⁶³ Smith, *Not So Quiet*, p. 44.
- ¹⁶⁴ Smith, *Not So Quiet*, pp. 171-174.
- ¹⁶⁵ Smith, *Not So Quiet*, p. 198.
- ¹⁶⁶ Smith, *Not So Quiet*, p. 147, 165.
- ¹⁶⁷ Smith, *Not So Quiet*, p. 47.
- ¹⁶⁸ 武田『〈新しい女〉の系譜』、299 ページ。
- ¹⁶⁹ Smith, *Not So Quiet*, p. 90.
- ¹⁷⁰ Smith, *Not So Quiet*, p. 147.
- ¹⁷¹ Smith, *Not So Quiet*, p. 89.
- ¹⁷² Smith, *Not So Quiet*, p. 132.
- ¹⁷³ Smith, *Not So Quiet*, p. 14.
- ¹⁷⁴ 書誌情報：ヘレンたち救急車運転手は、9 日間同じ服を着続け、4 週間湯船につかれないなど、不清潔な空間に置かれた。加え

て、そこでの食事は美味しくなく、彼女たちは空腹にも苦しんだ。

(Smith, *Not So Quiet*, p. 9,10,18)

¹⁷⁵ Brittain, *Chronicle*, p. 237.

¹⁷⁶ Brittain, *Testament*, p. 536.

¹⁷⁷ ジョゼフ・チルダーズ、ゲーリー・ヘンツィ編『松柏社業書言語科学の冒険⑥ コロンビア大学 現代文学・文化批評用語辞典』、杉野健太郎、中村裕英、丸山修訳、第3版、松柏社、2002年、245 ページ。(この文献は参考文献のみリスト化されており、引用部分の参考元が不明瞭である)

¹⁷⁸ Brittain, *Testament*, p. 610.

¹⁷⁹ Brittain, *Testament*, p. 614.

¹⁸⁰ Brittain, *Testament*, p. 23.

¹⁸¹ Brittain, *Testament*, p. 485.

¹⁸² Hynes, *A War Imagined*, p. 383.

¹⁸³ Brittain, *Testament*, p. 206.

¹⁸⁴ Brittain, *Testament*, pp. 211-212.

¹⁸⁵ Smith, *Not So Quiet*, p. 82.

¹⁸⁶ Smith, *Not So Quiet*, p. 84.

¹⁸⁷ 今井『現代イギリス女性運動史—ジェンダー平等と階級の平等』、217 ページ。

¹⁸⁸ 今井『現代イギリス女性運動史—ジェンダー平等と階級の平等』、217 ページ。

参考文献

- ・荒木映子『第一次世界大戦とモダニズム—数の衝撃』、世界思想社、2008年。
- ・荒木映子『ナイチンゲールの末裔たち—〈看護〉から読みなおす第一次世界大戦』、岩波書店、2014年。
- ・伊藤航多、佐藤繭香、菅靖子編『欲ばりな女たち—近現代イギリス女性史論集』、彩流社、2013年。
- ・今井けい『イギリス女性運動史—フェミニズムと女性労働運動の結合—』、日本経済評論社、1992年。
- ・今井けい『現代イギリス女性運動史—ジェンダー平等と階級の平等』、ドメス出版、2016年。
- ・マイケル・ウィットワース『時代のなかの作家たち 2 ヴァージニア・ウルフ』、窪田憲子訳、彩流社、2011年。
- ・大嶽秀夫『フェミニストたちの政治史 参政権、リブ、平等法』、東京大学出版会、2017年。
- ・リチャード・オルドリッチ『イギリスの教育—歴史との対話』、松塚俊三、安原義仁監訳、玉川大学出版部、2001年。
- ・河内恵子編『西部戦線異状あり—第一次世界大戦とイギリス女性作家たち』、慶応義塾大学出版会、2011年。
- ・河村貞枝『イギリス近代フェミニズム運動の歴史像』、明石書店、

2001年。

- ・川本静子『〈新しい女〉たちの世紀末』、みすず書房、1999年。
- ・佐藤繭香『イギリス女性参政権運動とプロパガンダーエドワード朝の視覚的表象と女性像』、彩流社、2017年。
- ・E. ショウォールター『性のアナキー 世紀末のジェンダーと文化』、富山太佳夫、永富久美、上野直子、坂梨健史郎共訳、みすず書房、2000年。
- ・杉村使乃『制服ガールの総力戦—イギリスの「女の子」の戦時貢献』、春風社、2021年。
- ・レイ・ストレイチー『イギリス女性運動史 1792-1928』、栗栖美知子、出淵敬子監訳、みすず書房、2008年。
- ・滝内大三『大阪経済大学研究業書 第61冊 女性・仕事・教育—イギリス女性教育の近現代史—』、晃陽書房、2008年。
- ・武田美保子『〈新しい女〉の系譜—ジェンダーの言説と表象』、彩流社、2003年。
- ・竹林滋ほか編『研究社 新英和大辞典』、第6版、研究社、2002年。
- ・ジョセフ・チルダーズ、ゲーリー・ヘンツイ編『松柏社業書 言語科学の冒険⑥ コロンビア大学 現代文学・文化批評用語辞典』、杉野健太郎、中村裕英、丸山修訳、第3版、松柏社、2002

年。

- ・ 林田敏子「制服の時代とイギリス—ジェンダー・セクシュアリティ・第一次世界大戦—」、『西洋史学』、231号、2008年、43-64ページ。
- ・ 林田敏子「警察とジェンダー—20世紀イギリスにおける女性警察—」、『歴史学研究』、860号、2009年、26-35, 75ページ。
- ・ 林田敏子『レクチャー 第一次世界大戦を考える 戦う女、戦えない女—第一次世界大戦期のジェンダーとセクシュアリティ』、人文書院、2013年。
- ・ 林田敏子「第一次世界大戦の記憶とジェンダー—イギリスにおける帝国戦争博物館と女性労働小委員会—」、『西洋史学』、267号、2019年、36-56ページ。
- ・ 林田敏子「研究のあゆみ—大戦史の「ジェンダー的転回」へ向けて—」、『家政学研究』、67巻2号、2021年、29-33ページ。
- ・ 林田敏子「軍隊のなかの女性たち—回想録から読み解く第一次世界大戦の記憶—」、『寧楽史苑』、67号、2022年、33-50ページ。
- ・ ジューン・パーヴィス『MINERVA 西洋史ライブラリー③① ヴィクトリア時代の女性と教育—社会階級とジェンダー—』、香川せつ子訳、ミネルヴァ書房、1999年。
- ・ フォルカー・ベルクハーン『第一次世界大戦 1914-1918』、鍋谷

郁太郎訳、東海大学出版部、2014年。

- ・吉田恵子「第一次世界大戦と英国婦人労働者」、『明治大学短期大学紀要』、33号、1983年、59-84ページ。
- ・Vera Brittain, *Chronicle of Youth: Great War Diary 1913-1917*, Ed. Alan Bishop, The Camelot Press Ltd, 1981.
- ・Vera Brittain, *Testament of Youth: an autobiographical study of the years 1900-1925*, London, 1933; reedition, Ed. Mark Bostridge, Prabhat Prakashan, 2019. (Kindle版)
- ・Joan N. Burstyn, *Victorian Education and the Ideal of Womanhood*, BARNES & NOBLE BOOKS, 1980.
- ・Sandra M. Gilbert/Susan Gubar, *No Man's Land: The Place of the Woman Writer in the Twentieth Century, Volume 2: Sexchanges*, Yale University Press, 1991.
- ・Samuel Hynes, *A War Imagined: The First World War and English Culture*, London, 1990; reedition, Pimlico, 1992.
- ・David C. Marsh, *The Changing Social Structure of England and Wales 1871-1961*, London, 1958; reedition, Routledge, 1998.
- ・Sharon Ouditt, *Fighting Forces, Writing Women: Identity and Ideology in the First World War*, Routledge, 1994.
- ・Helen Zenna Smith, *Not So Quiet...Stepdaughters of War*, London,

1930; reedition, The Feminist Press, 1989.

- Janet S. K. Watson, *Fighting Different Wars: Experience, Memory, and the First World War in Britain*, Cambridge University Press, 2004.